

No. J2108

都市における自己変容の経験としての芸術実践：ラオスの首都ビエンチャンにおける、若手アーティストに関する人類的研究

東京大学大学院総合文化研究科・博士後期過程

大村 優介

本研究は、ラオスの首都ビエンチャンで展開されている現代芸術の実践について、人類学的な現地調査によって明らかにすることを主な目的としている。

本研究では2022年8月～9月、12月にラオスの首都ビエンチャンで人類学的フィールドワークを実施した。さらに現地調査で得られた知見の分析のため、世界各地での現代芸術の実践に関する先行研究の検討を行い、必要に応じて日本国内での文献調査、美術館所蔵資料の閲覧なども行った。

世界各地で展開されている芸術実践は、その内容、歴史的変遷、規模などの点で地域ごとに大きく異なる様相を見せている。1975年に一党独裁体制が成立し、現在に至るラオスでは、言論・芸術活動は長らく政府の厳しい統制下に置かれてきた。しかし特に2010年代以降に首都の都市空間を拠点に、若手アーティストたちが公的教育機関とは別に独自のインディペンデントな芸術の実践を立ち上げている。

現地調査ではギャラリーの運営者、画家、映像作家、ダンサーなどと交流を行い、一対一での半構造化インタビューを実施した。また、展覧会への訪問や、ダンスカンパニーのワークショップへの参加、ダンス・フェスティバルへの（ダンサーとしての）参加も行い、人類学的な参与観察を行った。その結果特に顕著な特徴として見出されたのは、ジャンルを超えたアーティスト同士の交流関係である。様々なジャンルの若手アーティストたちは日常적으로お互いの活動を鑑賞し合い、交流しており、例えばダンスの公演に映像関係者がスタッフとして参加するなど、自然に協力関係が培われている。共同制作の試みは近年数を増しており、日々の何気ない会話の流れからすぐに企画が立ち上げる場面がしばしば見られた。

上記の研究活動に基づき、既に国内学会発表を行い、ウェブマガジンでの記事を発表した。今後はさらに分析を深め、研究発表、学会誌への論文投稿などの形で成果発表を行う予定である。